

62 孤高の外科医ギヨーム・デュピュイ

トラン男爵(一七七七—一八三五)

小林 晶

福岡整形外科病院

フランスのギヨーム・デュピュイトラン男爵 (Baron Guillaume Dupuytren, 1777-1835) は、近代外科学の発達に大きな貢献をして、その名は医学史上燦然と輝いている。彼の外科医としての終の棲家となる、パリのオテル・デイウの中庭には、一人だけ立像があることを見ても、如何に当時の中心人物であったかを知ることができる。文豪バルザックは、彼をモデルにした作品を多数書いている。政治的にも男爵を一八二一年に授けられている。黄金時代を築き始めたフランス医学の中で、外科医と理髪外科医との間の融和が漸くみられ、内科学の下に見られていた、外科学の地位が向上し、さらに彼の活躍で大きな地歩を占めるようになった。因に彼の生涯はわが国でいえば、「解体

新書」出版(一七七四)を契機にして蘭学が勃興し、適塾創設(一八三八)に至るまでの期間に相当する。

彼が多数の病理解剖の基礎の上に立ち、手術の巧みな外科医としての評価は、全ヨーロッパに拡がり患者が集った。

彼の業績は整形外科領域では、その名を冠する手指の拘縮、足関節骨折がよく知られている。世界で最初に下顎骨切除を行ったのは彼である。中でも、外科系の医師であれば誰でも一度は耳にする、「デュピュイトラン拘縮」が最も重要であるし、世界中のどの医学辞典にも記載されている。彼は一八三二年パリのオテル・デイウでの臨床講義で、この疾患の病因から治療法までを詳細に述べた。

しかし、この疾患の存在を記載したのは、デュピュイトランが最初ではない。ベルンのフェリックス・プラッター(一五三六—一六一四)は、既に一六一四年にこの疾患を記している。その後イギリス、セント・トーマス病院のヘンリー・クライン(一七五九—一八一六)は、偶然にもデュピュイトランの生まれた一七

七七年に二例の解剖例を発表している。しかも、一例には手掌腱膜の肥厚を認め、この切離によって屈曲した指の伸展に成功している。また、やはりイギリスのアストレー・クーパー(一七六八—一八四二)も、一八二二年に出版した著書に、手指のみならず足趾にもこの疾患が存在することを示し、腱鞘、手掌腱膜への慢性刺激が原因ではないかと推測している。クーパーは有名な外科医で、大部分の人はこの文献を読んでいたと考えられるし、フランスでも知られていた。デュピュイトランは一八三二年には訪英してクーパーに会っているが、この疾患の話はしていない。

今日、デュピュイトラン一人の名前がこの疾患に残ることになり、世界的に知られるようになった。勿論、彼が当時としては多くの症例を持ち、考察が鋭く、現在でも通用する詳細をきわめた記録を残したことへのオマージュがあるのは確かである。

しかし、それだけではなく、当時のフランス医学の勢いと、医学雑誌がバリでは週刊三誌、月刊二誌と多数出版され、他国の追従を許さなかった点がある。そ

れにも増して、大きいのは彼の性格にあったと考えた
い。

ほとんどの伝記、伝承、エピソードは、彼の強い攻撃的な性格と、多くの人達との確執を述べている。常に権力者がそうであるように、優位を得ねば承知せず、自尊心の強さと反発を考えるとき、彼を他人と同格に評価することなどは、おくびにも出せなかったという。院内ヒエラルキーに固執する反面、前任教授ペルタン
の手術の批判は面と向かってしたし、英国のプライオリティを主張するリスフランとの確執は有名であった。ナポレオン軍の軍医長であった、ペルシは「デュピュイトランは外科医としては最高であったが、人間としては最低であった」と酷評している。アメリカの近代教科書にも外科医、教師としては知られても、個人的にはほとんどの人から嫌われたと記載されている。教科書にまで悪評の記述がある事実は、彼が力を恣意的に駆使し、冠名にまで影響を及ぼしたのではないかと想像される。